

第2章

各教科における取り組み

三小田 博 昭・澤 井 祐 哉・佐 藤 俊 樹

英 語

(1) 目的

高校1年生の授業で「協同的探究学習」を取り入れた辞書指導を行った。本校は併設型中高一貫校であるため、高校1年では、附属中学校からの内進生80名に、外進生40名が新たに加わる。内進生、外進生でクラスを分けることはせず、同じクラス内に内進生と外進生が混在する。そのため、高校1年生にとっての、大きな関心事は、1) 新しい学習環境に慣れることがまず挙げられる。また、英語の授業だけではなく、多くの授業内容が中学の時に比べ高度化するため、2) 高校での授業内容に対応できるかどうか大きな関心事となる。

1) に関しては、協同的探究学習を通じて、クラスの中で友人関係を築ききっかけができ、そのことが、新しい環境へ適応できるという個人の自信につながり、結果としてクラスへの満足感が構築されると考える。

2) に関しては、中学英語から高校英語のつながりをゆるやかに進むため、教科書学習に先立ち、学習英語辞書指導を通じ、生徒が「言語としての英語」や「英語を取り巻く文化」への関心が向上し、「英語を習得したい」という意欲や「高校英語に対する前向きな意識」が向上することで、高校英語へソフトランディングが可能であると考える。

(2) 実施方法 (指導計画 辞書指導 全10回)

- 第1限 オリエンテーション
 - ・ 高校英語の概要説明 Preアンケート
 - ・ 教員こだわりマップ
- 第2限 自分を紹介しよう
 - ・ こだわりマップ
- 第3限 自分の辞書を紹介しよう
 - ・ おすすめ辞書カタログ
- 第4限 辞書の暗号読解
 - ・ 辞書で使われる記号の理解 問題作成
- 第5限 辞書の暗号読解
 - ・ 解答作成 発音記号
- 第6限 辞書の不思議

- ・ 解答作成 単語のイメージ 動詞編 前置詞編
- 第7限 辞書の不思議
 - ・ 文法編 コラム編
- 第8限 辞書の力
 - ・ ポスターセッション準備
- 第9限 ポスターセッション
- 第10限 Postアンケート

(3) 内容

書店で各自紙辞書を一冊購入することを春休みの宿題として、生徒に課した。ただ単に購入するだけでなく、なぜその辞書を購入しようと考えたかについて簡単なレポートにまとめさせた。全10回の辞書指導で、第4限(辞書の暗号読解)～第7限(辞書の不思議)の授業で「協同的探究学習」を取り入れた。

第1限(オリエンテーション)～第3限(自分の辞書を紹介しよう)までは、仲間作りを主眼において授業を行ったため、「協同的探究学習」は行っていない。また、第8限(辞書の力)と第9限(ポスターセッション)は、辞書を書店で初めて購入する高校生に魅力的に映る辞書のカバーや宣伝文句、内容紹介をグループで考案させ、それを発表させた。

(4) 授業案の例 (第4限 辞書の暗号読解)

0) 授業環境づくり

第3限(自分の辞書を紹介しよう)の中で、優れた発表をした生徒にモデル発表をクラス全体の前で行う。また、優秀プレゼンテーション賞として賞状を授与する。

1) 個別探究 I : 個人での暗号探し (10分)

自分が春休みに購入した辞書の中で使われている辞書記号を抜きだし、配布した一覧表に書き出す。

2) 協同探究 I : グループ内で各自が調べた辞書記号の共有 (5分)

どの辞書にも共通して記載されている辞書記号の共有 (5分)

特定の辞書にしか記載されていない辞書記号の調査 (5分)

グループ分けをする際、同じ辞書を持っている生徒がなるべく同じグループに属さないように配慮する。

3) 個別探究Ⅱ：自分が購入した辞書の特性や特徴を考える (10分)

(5) 検証評価 各尺度の対応のあるt検定の結果と内進生・外進生の2要因分散分析の結果

	事前	事後	t値	自由度	有意確率
クラスへの評価	3.53 (0.78)	3.60 (0.78)	-1.62	120	0.11
クラスへの親和性	3.36 (1.07)	3.64 (1.04)	-4.39	120	0.00**
クラスへの介入	3.86 (0.75)	3.95 (0.73)	-1.99	118	0.49*
自己受容	2.94 (0.85)	2.94 (0.89)	0.00	117	1.00

* $p<.05$ ** $p<.01$

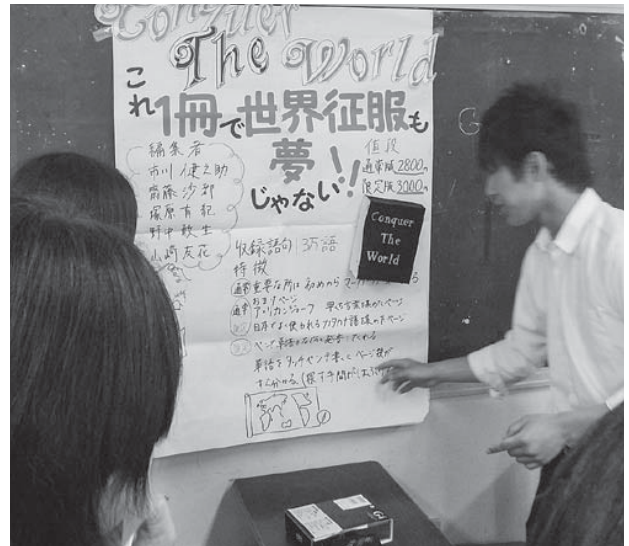
		内進生		外進生		事前 事後の 主効果	交互 作用		
		n	M	S D	n			M	S D
クラスへの 評価	事前	80	3.40	0.76	41	3.77	0.77	2.14	0.04
	事後		3.48	0.77		3.83	0.76		
クラスへの 親和性	事前	80	3.57	1.00	41	2.94	1.09	26.24**	7.178**
	事後		3.74	1.03		3.46	1.04		
クラスへの 介入	事前	78	3.82	0.76	41	3.96	0.74	2.3	1.46
	事後		3.94	0.72		3.97	0.77		
自己受容	事前	77	2.79	0.86	41	3.21	0.77	0.13	1.35
	事後		2.83	0.90		3.13	0.85		

* $p<.05$ ** $p<.01$

t検定の結果「クラスへの親和性」「クラスへの介入」については、事前調査と事後調査の間に有意な差が認められた。他方、「クラスの評価」「自己受容」に関しては有意差が認められなかった。2要因分散分析の結果「クラスへの親和性」尺度に関して、外進生と内進生で有意な主効果と交互作用が見られた。



第6限 辞書の不思議 前置詞編



第9限 ポスターセッション

(文責 三小田博昭)

国語

(1) 目的

今日の教育現場では、教員から生徒へ講義する形式の授業から、生徒同士が教え合い、学び合う授業へ、そして生徒が自発的に気づく授業へと変化が求められている。実際、アクティブ・ラーニング(能動的学習)の手法が、近年様々な場面で注目を浴びている。

また、昨今の学習指導要領において言語活動の充実が求められている。従来の指導方法では対応しきれないことも多く、新たな取り組みが必要とされ、試みられている。

こうした状況の下、協同的探究学習は「思考プロセスを明らかにする個人探究場面Ⅰ」「多様な考えを比較検討する協同探究場面」「知識の関連づけから問題の本質

をつかむ個別探究Ⅱ」の三段階を踏む学習を通して、現代教育の求めに最も応え得る学習方法のひとつだといえる。

本校国語科における協同的探究学習の一例として、高等学校現代文の定番教材である『山月記』における取り組みを紹介する。教員が一方向的に解釈を説明するのではなく、生徒同士が話し合いを通じて、主体的に解釈と鑑賞を深めていく授業である。文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを的確にとらえ、表現を味わうこと、また、生徒ひとりひとりが積極的に言語活動に携わり、コミュニケーション能力を磨き、生きる力を身につけることを期待している。

(2) 実施方法

	指導内容
課題の前提の確認	『山月記』本文の読解
個別探究Ⅰ	問「作者の書きたかったこととは何か」について各自で考えさせる。 読解のヒントになる小問の書かれたプリントを配布し、考察の助けとする。
共同探究	問について、小説全体を踏まえて班で議論させる。 班同士で、お互いにまとめた内容を発表させ、解釈をまとめさせる。 班の代表者に「作者の書きたかったこと」を板書させ、口頭で板書の根拠を解説させる。
個別探究Ⅱ	班を解消し、改めて生徒を指名し、一項目ずつ生徒の言葉で解説させる。 感想を書かせ、提出させる。

(3) 内容

1) 個別探究Ⅰ

「作者の書きたかったこととは何か」という問について、小説全体を踏まえて考えさせる。

読解のヒントとして「袁愴の物語上の役割」「月の物語上の役割」「李徴の考える自分が虎になった理由の変化」「『再びその姿を見なかった。』について」「人虎伝との相違点」という小問の記載されたプリントを配布し、考察の助けとする。

2) 共同探究

①班で議論

問について、小説全体を踏まえて考えさせる。

4人で1班を作り、机を合わせて議論させる。(計10班) 議論を助けるため、まとめプリントを使用する。

②班同士の発表

班同士で、お互いにまとめた内容を発表させる。

質疑応答を経て議論を深め、2班の解釈をまとめさせる。

③全体発表

2班の代表者に「作者の書きたかったこと」を板書させる。(計5種類)

その後、口頭で板書の根拠を解説させる。

全ての班の発表後、一番納得できたものに挙手をして、クラス全体の評価を把握させる。

3) 個別探究Ⅱ

班を解消し、通常の机の配置に戻す。

生徒を指名し、まとめプリントを使用して一項目ずつ解説させる。

班で話し合ったことや、板書、口頭発表を踏まえて解説させる。

生徒自身の言葉でまとめ、理解させることを心がける。最後に本時及び単元全体の感想を書いて提出させる。

(4) 検証評価

協同的探究学習を取り入れた授業に対して、生徒は様々な反応を示した。以下に生徒の書いた感想を記載する。

「作者が伝えたいことは？」というのをわかることは大変だったが、最後にわかってよかった。」
 「いろいろな解釈があり、話し合いがおもしろかった。」
 「グループワークだと考える機会が増えるのももっとやってほしいです。」
 「表現が何を指したり、暗示しているのかワクワクしながら予想し、読み進めることができた。」
 「自分のことを書かれているようで、心が痛かった。」
 「普遍的な問題を書ける中島敦は天才だと思った。」
 「今回は『月』に着目したが、『山』の意味についても考えたい。」
 「僕はラストシーンで李徴が人間に戻ったと考えた。」

生徒は今回の授業を通して、理解を深め、多様な解釈を知り、自主的に考えるようになった。また、知的好奇心を刺激して、より発展的な問いに興味を持つようになった。

課題は、解釈の多様性を維持したまま、生徒全員が納得するまとめに導くことである。お互いの解釈の共通点、本質的な部分を見だし、理解させる能力が必要である。また、班ごとの発表が似通ったものばかりになってしまった場合の対処も検討すべきである。

協同的探究学習は、生徒が主体となって学習に取り組むことができ、個別的学习のみの場合よりも深い考察が

できるようになる。また、言語活動との相性も良く、活発に議論を交わすことのできる学習活動である。今回の学習活動でも、文章を読み込み、自主的に考え、根拠を明確にして表現できる力を身に付けさせることができたのではないだろうか。今後も積極的に授業へ協同的探究学習を取り入れ、生徒の能力を伸ばしていきたい。

(文責 澤井祐哉)

(4～5時間)

ほとんどの発表は、要旨をまとめた原稿を読み上げる型式であったが、中には寸劇を行ったり、テレビ番組の現場レポーターになりきったりと、ユーモアを交えながらも充実した内容を伝えるグループも現れた。

3. 社会

(1) 目的

入学間もない中学1年生は学習意欲が強く、特に夏休みまでの授業では挙手が多く、発言も活発である。ところが、夏休みが明け、季節が深まると次第に反応が悪くなっていく。これは、毎年中1の社会(地理的分野)を担当する中で感じていたことである。いっぽう、毎回授業の最初は日替わりで担当者を決め、地図帳に載っている地名について調べてきたことを発表する取り組みを10年以上にわたって行ってきた。資料を提示しながら生き生きと発表する生徒もおり、またそんな生徒に触発されて詳しく調べる者も現れるようになり、生徒は聴く一方ではなく自ら調べることに楽しみを見出すものであるという手応えを掴んでいた。そんな中で本校に協同的探究学習が導入されることになり、私も通常の授業の部分を平成25年度から従来型の一斉授業から方法を改め、1年間の後半を協同的探究学習で授業を進めることにした。

(2) 実施方法

対象学年の中学1年生では社会は週3時間である。後期にあたる10月から2月に、4つのテーマで4人あるいは5人のグループで協同的探究学習を行った。授業の流れは次のとおりである。

①グループを結成し、グループ単位で調べる地域または分野の希望を固め、抽選で決定する。

②決定した地域または分野について個人で探究し、各自が配布されたワークシートにまとめる。

(ここまで2時間)

③グループ全員がワークシートを持ち寄って協同で発表内容を検討し、発表要旨を1枚の紙に清書する。

(1時間)

④発表要旨を全員に配布し、これにしたがって各グループが3～5分で発表する。実物投影機を利用して、モニターで資料の提示をしてもよい。(2時間)

⑤教師が発表要旨のプリントに補足を加え、自分が担当しなかった地域についての学習を個人で深める。

(3) 内容

(第1回) 10月 「ケッペンの気候区分」

熱帯雨林気候・西岸海洋性気候など10の気候区を農業や文化に関連づけ、4人グループで担当した。

(第2回) 11月 「日本の人口問題」

北海道、東北、関東①、関東②、中部、近畿、中国・四国、九州の8地域を交通や観光などに関連づけ、5人グループで担当した。

(第3回) 1月 「日本の第1次産業」

北海道、東北、関東、東海、中央高地・北陸、近畿、中国・四国、九州の8地域を農林水産業から眺め、5人グループで担当した。

(第4回) 2月 「日本の第2次産業」

北海道、東北、関東、中部①、中部②、近畿、中国・四国、九州の8地域をおもな工業に着目し、5人グループで担当した。

中学1年生はほぼ毎月席替えをするので、毎回異なるメンバーで取り組むことができ、生徒には良い刺激になった。



発表風景 (モニターで資料を提示する者と原稿を読み上げる者と役割を分担している)

(4) 検証評価

「先生、次のグループ学習いつやるのですか？あれ楽しい！」と何人もの生徒から言われる。生徒にはこの授

業方法は、一定の評価をもって受け入れられているようである。

ただ、克服しなくてはならない課題も多くある。本校の協同的探究学習の流れは、①「思考プロセスを明らかにする個人探究場面Ⅰ」、②「多様な考えを比較検討する協同探究場面」、③「知識の関連づけから問題の本質をつかむ個別探究Ⅱ」である。私の実践では、①は個人で調べてワークシートにまとめるという状態に留まっており、思考プロセスを明らかにする域には達していない。これからの課題である。②については、上手に個人のまとめができた生徒がいると、グループでもその原稿の大部分あるいは全部を採用しようとするのがよくあることを反省しなくてはならない。机間巡視中のことば掛けを充実させることで、一人に頼ることなく多様な考えを比較する姿勢を養わせたい。協同探究の後は私が一斉授業で解説をしてその単元は終了としている。③は時間に限りがあるので困難を伴うが、もう一度個別探究に戻す工夫をしてみたい。

自らが立てた指導計画に従って一斉授業を行えば、どのクラスでもほぼ同じような内容を伝えることができる。ところが、生徒の自主性に任せて調べさせるこの方式では、同じ地域を両方のクラスでまったく異なる原稿を書いてくることが頻繁に起こる。両方の原稿をよく読み比べて話す内容をしっかり確認しておかないといけない。片方のクラスでしか触れていない内容を定期試験に出題するというミスをしてしまったので、繰り返さないようにしたい。

特定の地域に関する内容のときと、どの地域にもあてはまる一般的共通性をもった話題（例：日本の米農政、高齢化や後継者問題）のときとでは、前ページ（2）実施方法⑤の補足の加え方が変わってくる。生徒たちが調べた各地域に直接関係する内容のときは教壇上から説明し、地域の枠をこえて共通する系統地理的問題を話すときは教壇上にいるよりも、教室の中央の生徒たちに近い位置に立った方が伝わりやすいという感触を得た。協同的探究学習を採用してから3年になるが、よりよい授業をめざして検証を続けていきたい。（文責 佐藤俊樹）

習熟原稿 (提出用) 印刷するので黒一色で書くこと 薄いと印刷されないので注意! 318

4 班	メンバー :			
担当気候区 (砂漠)	気候	教科書 P.	資料集 P. Wikipedia 利用	電子手 P.

砂漠気候とはケッペンの気候区分における気候区のひとつで乾燥帯に属する。特徴は年間降水量が少なく日本で言う春と秋にあたる季節はないに等しい。日較差が非常に大きい。

植物があり育たず水源のある地域にオアシスがある。風が強いため砂嵐が発生し被害を受ける。温暖な地域のオアシスでは、砂漠土はアルカリ性。ヤシ科の植物がよく盛育ちが起りやすいため植物が育たない。見られる。

人々の暮らし

- ・オアシスの周辺で農業を行っている。→ ナツメヤシが採れる。
- ・カタトなどの地下水道がある地域がある。
- ・移動手段 ・アフリカ大陸 ラグダ
・アゾア 馬
- ・ペルシャ湾岸の都市では、原油採掘による大量の資金が流入し、自由な開発によって多様な産業が急激に発展している。

人口が急激に増える傾向がある

Desert

発表要旨原稿 (砂漠気候の例; 要点をコンパクトにまとめてあるとともに、分布図やイラストを描いて、見る者がわかりやすくなるような配慮をしている)